五山文學新集

第六卷

玉村竹二編

玉村竹二編

五山文學新集

第六卷

東京大學出版會

学術書刊行基金

編者略歴

明治44年　名古屋に生る
昭和10年　東京大學文學部國史學科卒業
同　　年　東京大學史料編纂所員
昭和44年　東京大學史料編纂所教授を退官

著　書

『五山文學』至文堂
『夢窓國師』平樂寺書店
『圓覺寺史』春秋社（井上禪定共著）

現住所　東京都杉並區上荻4丁目4番5號
杉並コーポラス303號

五山文學新集　第六卷

1972年3月31日　發行

檢印
廢止

©編　者　玉村竹二
發行者　福武直

發行所　財團法人　東京大學出版會
113　東京都文京區本郷　東大構内（811）8814・振替東京 59964

ヨシダ印刷・矢嶋製本

3395-86163-5149

五山文學新集

第六卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序

先年來、本集全六卷刊行を計劃のところ、こゝにその最終卷を漸く完成した。これで『五山文學新集』の校刊は完了したのである。さきに第五卷の序文に於て、一千頁を越す大册の校刊を連年つゞけるのでは、五年五卷が體力氣力の限度ではなかつたかと思ふのに、全六卷の企劃を樹てたのでは、その最終の卷は、餘程の餘勇を振つて立向はなければなるまいと思ふと書いたが、いざその最終卷に立向つて見ると、その餘勇の程も、ほと〳〵盡果ててしまつた。二三年來の持病の方は、さして進行しなかつたのはまづ〳〵よかつたが、何としても時間に追はれるための氣苦勞から、氣力の方が一番衰へてしまつた。したがつて校訂校正の進行度は動もすれば鈍り勝で、期限の切迫につれて、いひ知れぬ憔悴感にかられ、寢られぬ每夜を送り、睡眠不足は又翌日に疲勞を殘し、全く生れて始めて經驗する苦腦に困却した。果してどこまで自ら手を下して出來るか、何時執筆或は校正不能におちいるか、今日も何とか自ら手を下し得たが、明日はどうか、やつと全卷の半ば迄は、自らの眼で見ることが出來たが、さて三分の二迄行けるかどうかといふやうな不安を抱きながら、ともかくもやつと仕上げることか出來た。根幹になる作業は輕うじて自力でやり遂げたが、派生的な部分では、本卷程、多くの方々の同情ある援助に依つたことはない。それらの方々には深甚の感謝を捧げなければならないことはいふ迄もないが、しかし、ともかくも全六卷が出來上つたといふ喜びをも嚙みしめたいが、今はまだ茫然としてゐて實感が湧かない。しかし出來上つたのは確かである。矢張り第五卷の序文に書いたや

うに、これで、能ふ限り廣汎な作品を網羅して傳承出來ることが約束され、私個人にとつても、學界にとつても、この上ない幸を確保することが出來たのである。これでこの計劃を樹立し、私をして實行せしめられた森末義彰・竹內理三兩氏に對しても顏向けが出來るといふべきである。

毎卷の序に繰返すことであるが、嘗て上村觀光居士によつて刊行された『五山文學全集』には、五山文學の主要な作品が收錄され、大正初年以來學界を益すること多大であつたが、惜むらくは、もう一歩といふところで中斷してしまつた。且つ文學作品としての價値以外に、歷史の史料としての價値を認めるとすれば、なほ更多くの未刊の五山文學作品があり、そのうちには、一流のもので、まだ一般世人の目に觸れることなくして埋もれてゐるものも一二に止まらない。これは斯學のために甚だ遺憾である。どうにかして、これらを公刊したいといふ趣旨から、戰前に於て、既に元史料編纂所長森末義彰氏（當時は史料編纂官であつた）が、この集の企劃を樹て、その手始として、横川景三の『補庵京華集』（本集第一卷所收）を手がけ、原稿作成の段階まで行つたが、戰爭の熾烈化によつて、その計劃は頓挫した。それを昭和四十年春、當時の史料編纂所長竹內理三氏が復活され、東京大學出版會から刊行されることになつた。もつと詳しい經緯は第一卷の序に述べておいたから、それに讓るが、以上のやうな事情で生れたのが本集であり、名づけて『五山文學新集』といひ、一應『五山文學全集』とは別個のものとし、未刊のものを優先するとはいへ、『全集』を含めて、他の叢書所收のものなど、おしなべて、既刊のものと雖も、それよりもよい本を得れば、それを底本として、本集に收錄し、また時には泥中の白蓮の如き、未知の作者の珠玉篇をも、その間に交へて收載し、世に紹介しようとするものである。例へば本卷に收めた秋澗道泉の『秋澗泉和尙語錄』などがこれである。

本卷に收めた作品は、偶然鎌倉時代と室町時代中期の應仁の亂を挾んで、その前後に亘るものとの二大群にかたよ

つてしまつた。前者は秋澗道泉・鏡堂覺圓・無象靜照で、後者は季弘大叔・萬里集九である。わづかにその間隙をつなぐものとして南江宗沅がある。鎌倉時代には、未だ五山制度も確立してゐないから、その時代の作品は、いはゞ五山文學の前驅をなすもので、純粹に五山文學とはいへないが、南宋の景定咸淳年間の爛熟した貴族の社交界の所產である俗化した詩文、殊に事ある毎に一堂に會して作られた詩を軸裝した詩軸頌軸の盛行の影響を蒙つてゐるこの時代の作者のものは、それなりに紹介する意義があると思つたので、この時代のものを力めて收載した。就中、鏡堂覺圓は本集中唯一人の中國人であり、その作品は、その意味で注目されよう。無象靜照の作品は、本集中、年代的に最古のもので、その底本も天下の孤本であるから、その傳承を强く希望した爲である。秋澗道泉の作品は、文學的價値に於ては、稍劣る慊がないでもないが、その內容に北條貞時をめぐる鎌倉幕府高級武士に關する法語が極めて多いので、鎌倉時代末期の政治文化史の貴重な史料となるであらうと期待して、特に收錄したものである。あとの三人は、偶然にも揃つて隱遁者である。しかし三人それ〴〵個性があつて、南江宗沅は、五山禪林の爛熟頽廢を厭ひ、ひそかに一休宗純會下に走り、泉南に庵居して、一生を終つたが、破戒の生活に稍足を踏入れてはゐるが、禪僧の身分を自らは否定してゐない。たゞ五山禪林を厭ひ、林下に潛入したのである。それに引かへ、季弘大叔と萬里集九は、一時代後の人で、應仁の大亂に遭遇してゐるだけに、南江とは異つた現世否定の氣分が濃厚で、反戰ではないが厭戰作家ともいふべき人々である。しかしこの二人は、自らその行き方を異にしてゐる。季弘は五山禪林を否定も肯定もせず、身を成行に任せ、たゞ泉南の地に籠り、病弱の身を喞ちつゝ亂世を橫目で見て、靜かに一生を終つた、いはゞ無抵抗主義の人であるのに對し、萬里集九は、應仁の亂の打擊を一時的には非常に强く受け、將來を暗澹たるものと觀じ、五山禪林の崩潰を豫見して、破戒→還俗の經路を辿つたが、文明年間に入り、世情が萬里の豫期に反し、案外舊に復した

ので、五山禪林に未練を生じ、身は方外の士ながら、從前通り五山禪僧との交友をつゞけることに喜びを感じてゐた人である。即ち外面的には最も五山否定の樣相を呈しながら、內面的には最も五山禪林を肯定して、その最直中に在つた人といふべきで、この三人の隱遁の性格の比較は興味深い。南江宗沅の作品は『漁庵小藁』のみで、殆ど事足り、わづかに內閣文庫本の『鷗巢詩集』によつて缺を補へばよいと思ひ込んでゐたところ、はからずも國立國會圖書館に比較的最近整理の上閲覧に供せられるやうになつた土肥慶藏氏舊藏の本（號を鶚軒と稱したので、同圖書館では便宜之を鶚軒文庫と呼んでゐる）のうちに二本も別本が出て來て、そのうちの一本『鷗巢賸藁』と題する本は、殊に七言絕句の部に於て『漁庵小藁』を上まはる多量の作品を擁し、中々の善本である。これも校正の段階で補入の工作を加へなければならなくなり、一苦勞であつた。土肥氏は、私にとつても多少の緣がある。私の母方の祖父は越前出身の軍醫で、日本赤十字社に於て相當の地位に在つた者であるが、土肥氏は同鄕の後輩であり、ある點まで祖父の門弟のやうな所もあつた。その緣によつて私の幼少の時、小兒性の皮膚病——それも小兒の日常罹る單純なもの——の治療を受けたことが度々あつた。土肥氏といへば人も知る皮膚科の泰斗で、名聲一世を風靡してゐたのであるから、恰も牛刀を以て鷄を料理するやうで勿躰ない話であるが、明治人のことであるから、兄事する人の孫のためには嫌な顏一つせず、塗藥を施して呉れたものである。その人の遺書に、思はない所でめぐり會ひ、それをこの校訂に用ふこととなつたとは、誠に奇しき因緣といふべきで、感慨無量である。季弘大叔は、既にその日記『蔗軒日錄』が東京大學史料編纂所から『大日本古記錄』の一册として校刊されてゐるので、その因みに、その人の文集も公刊し、兩者相俟つてその文藻の全貌を知ることになると思つたので、敢て收錄した次第である。最後に『梅花無盡藏』は、第一卷に收めた横川景三と共に、本集所收の諸作品中でも、最も有名なもので、既に『續群書類從』にも收められ、活字になつてゐ

るが、惜しいことに、その本が全七卷のうち、卷七の後半が缺失してゐる。それを補つて七卷全部完備してゐる本を得たので、今回重ねて收錄することにした。その上草稿本の抄錄と思はれる京都大學國史研究室所藏本があり、これには『續群書類從』本や全七卷完結本にない佚文が相當にある。その他この集には夥しい寫本があり、校訂の煩雜なこと、この上なく、當初は、その有名度に惹かれて、横川景三作品に引つゞいて、第二卷に收載する筈であつたが、餘りに多く諸本が傳存するので、準備が行屆かず、そのため、一寸延ばしに延ばして、とう〳〵最終卷を迎へ、どうしても入れなければならなくなり、漸く決心して、その最末に收めたが、案に相違せず、その校訂には、全く筆舌に盡しがたい苦勞があつた。まして六年間の疲勞が累積して、氣力が衰へてゐる時期のことである、この集を手がけてゐる期間中、全く苦鬪の日々が續いた。しかし本集の一つの目的が應仁の亂直後の東山時代の作品の紹介に在るとすれば、その時代の二大名作、即ち横川景三集と萬里集九集を以て、本集の開結とし、その首尾相應ずることになつたのは、巧まずして編次の妙を得たと、自ら悅に入つてゐる次第である。その史料としての重要性については、贅言を要しない。既に國史學界の常識となつてゐる所であるから。かゝる重要な史料的作品を、畧完全な形にして世に出すを得たのは、私としては大いなる喜びであり、學界の活用を自負を以て期待するものである。

この卷には、その最末に、全卷を通じての補遺を附した。それは第一卷の横川景三集のうちの『蘿蔔集』、第二卷の惟肖得巖集のうちの『少林四六集』、第四卷の彥龍周興集のうちの『半陶藁』、第五卷の瑞溪周鳳集のうちの『臥雲藁』の佚文（『翰林五鳳集』よりの抄錄）である。その逐一の收錄理由については、補遺の部の解題に詳述したから、それを參照していたゞきたい。

終に、本集に收載の豫定であつたのに、つひに割愛せざるを得なかつたものに明極楚俊・乾峰士曇・江西龍派の三

集がある。それは甚だ殘念なことである。明極楚俊は『五山文學全集』に『明極楚俊遺稿』と題して、一應はその作品の八割方は活字となつてゐるので、今回は見送つた。乾峰士曇には『廣智國師語錄』があるが、これも和泉堺に於て、江戸時代に木版として上梓され、昭和の初期に後刷も出てゐるので、全く未知の本といふ譯でもなく、ある程度世に流布してゐるので、今回は割愛したのであるが、この集は、第二卷に收めた友山士偲（ゆうざんしさい）の『友山錄』と、內容的に深い關聯があり、兩々相俟つて、收錄の意義があつたのであり、その片方を缺いたのは、全く殘念である。今回は本卷を以て完結させなければならない諸般の事情があるが、他日何等かの機を見て、何等かの形で、この集だけは日の目を見せたいと、心に期してゐる。次に江西龍派の作品であるが、これは本卷に收錄の豫定で、原稿も出來、既に初校まで組上つたが、南江宗沅作品の思ひがけない增加のため、つひに割愛を餘儀なくされた。江西は心田清播（しんでんせいは）と共に、嘉吉・文安頃の主要作者であり、是非收載したかつた。これも乾峰の作品と共に、他日を期するものである。この外、月舟壽桂・常庵龍崇・彭叔守仙・仁如集堯・玉隱英璵・龍派禪珠等、永正より寬永に至る主要作品、また遡つては鎌倉時代の東明慧日、南北朝時代の傑翁是英、室町時代初期の天祥一麟・惟忠通恕・瑞巖龍惺等、列擧すれば際限がない程、五山文學作品はまだ〳〵盡きない。しかし當方の體力と氣力の方が盡きてしまつたので、今回は本卷を以て完結としたい。萬一この疲勞が回復し、餘命を保つことが出來たら、五年十年ののちに、これらについて、再考の機會があるかも知れない。しかし甚だ殘念ながら本集は、これで御免を蒙りたい。

本卷の校訂には、非常に多くの方々の同情ある助力をいただいた。これは偏へに私の疲勞を憐愍して御援助下さつたもので、誠に天佑神助ともいふべきである。まづ、大阪市立美術館寄託の妙心寺龍華院本『梅花無盡藏』の調査撮影を東京國立博物館の海老根聰郎氏にお願した。又國立國會圖書館の鶚軒文庫本『梅花無盡藏』二本の再調査にも、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

同氏を煩はした。いづれも前述の如く、私の多忙と疲勞とのためで、同氏の學力と誠意とを、この上なく信頼したからである。こゝに篤く御禮を申述べる。次に補遺に收めた横川景三の『蘿蔔集』ついては、その善本が越前田谷の妙心寺派の寺院大安寺（大愚宗築開山）に存在することを教へて下さつたのは瀧田英二氏であるが、同氏は私の多忙と疲勞を慮つて、自ら再三に亘つて福井市の同寺に足を運ばれ、『蘿蔔集』について詳細な調査を遂げられ、その結果を悉く私に提供して下さつたのである。同氏は又瑞溪周鳳の『臥雲藁』の後半に收められてゐたと思はれる主として七言律詩の作品が『翰林五鳳集』に百首前後も散見することを強調し、是非之を補遺に入れるやうに強く希望され、自ら手を下して原稿作成に助力された。これらのことについて、同氏の御厚意に重々感謝の意を表する。同氏は第二卷以來、或は家藏の本を底本として提供され、或は語句の出據について示教を受ける等、本集については深い關心と助力を惜しまれなかつたが、本卷に於ては、特に私の力の闕を補はれること多大であつた。又同氏には、校正途中に新たに出て來た南江宗沅の『歐巢賸藁』及び『歐巢小嵩』と、從來知られてゐた『漁庵小藁』『鷗巢詩集』との作品の出入の調査をお願したところ、その結果、底本『漁庵小藁』に不足した分の「作品拾遺」の原稿まで書いて下さつた。これ又この上なき御好意によるもので、感銘の至である。

この卷の校訂刊行に當つても、從來と變らず、和漢の文獻に通曉した史料編纂所の碩學泰斗太田晶二郎氏の御示教を蒙ること多大である。外典故事の出典、難讀な文字の解讀については、すべて同氏の御教導に遵つた。それでもなほこの方面で誤謬が殘つてゐるとしたら、それは不覺にも同氏に教を請はずに、さかしらに自己流でやつてのけたためか、或は教を受けても、その趣旨を誤解したために生じたもので、その責任は、專ら私に在るといふべきである。茲に更めてあつく御禮を申述べる。

次に印刷校正については、本卷も專ら千葉大學の田中久夫氏が、多忙な時間を割いて、獻身的な助力を惜しまれず、一々原本にあたつての校正をして下さつた。殊に本卷には內閣文庫本の『翰林五鳳集』を底本に用ひた部分があるが、その分に就ては、態々同文庫に出向いて原本當りを遂げて下さつた。同氏は第一卷の時から六卷盡くの再校を受持ち、その悉くを原本當りによる校正をお願したが、その間六年間、大學の敎務多端の間隙を縫つて、之をなし遂げて下さつた。往々にして一行の脫落や、錯簡を發見して下さつたお蔭で、恥をかゝずに濟んだ箇所も多々ある。いま完結に際して、改めて心からお禮を申述べたい。

原稿の書寫は、私自身の手に成るのが原則であるが、本卷では私自身の疲勞から、半分以上、他人の手をわづらはした。即ち『鏡堂和尙語錄』、無象靜照の『興禪記』については、東京大學出版會の成田良輔氏が自ら御申入れがあつて、その御好意に甘へて、その書寫をお願した。出版社當局の方の助力などは、全く異例のことで、その御親切は誠に身に泌みて感謝の至である。『無象和尙語錄』の上卷は田中博美氏に、下卷は駒澤大學の葉貫磨哉氏にお願して書寫していたゞいた。田中氏は東京大學敎養學部の學生で、五山文學硏究を志すといふ。史料編纂所の今枝愛眞氏の紹介によつて助成を遂げられたものである。葉貫氏は以前の諸卷についても、往々書寫の勞を執られ、今回も又敎務の餘暇を以て、書寫の功を畢られた。共に心から御禮を申上げる。『梅花無盡藏』（八册本）は、五年前に、史料編纂所の菊竹弘氏にお願して書いていたゞいておいたものを用ひた。その他、前述のやうに南江宗沅の作品拾遺は瀧田英二氏の手を煩はしてゐるし、補遺のうちの『翰林五鳳集』は田中博美氏の手を煩はしてゐる。いづれについても深く感謝の意を表する次第である。

又本卷には特に鎌倉時代の作品が多く、その中に出る人名の傍註には全く同時代の素人の私には苦勞の種であつ

た。よつて同時代の專門家たる名古屋大學の佐藤進一氏に再三再四質問狀を呈し、同氏は御多忙中を一々根據となる史料を示して、御示教にあづかり、御蔭を以て、却つてこの部分の方が、正確な傍註がついたといふ結果になつかに見える。こゝに改めて篤く同氏に御禮を申上げたい。

次に諸本の本文採訪撮影については、『秋澗泉和尙語錄』『漁庵小藁』については明治大學の臼井信義氏、八册本『梅花無盡藏』、京大本『五山禪僧詩文集』は史料編纂所の高澤實氏、『無象和尙語錄』『歐巢詩集』は池嶋伸三郎氏、『歐巢賸藁』『鷗巢小藁』は高橋寫眞館、大阪市立美術館寄託妙心寺龍華院本『梅花無盡藏』は東京國立博物館の海老根聰郎氏、兩足院本『鏡堂和尙語錄』は千葉大學の田中久夫氏、彰考館本『無象照公夢遊天台石橋偈軸』は史料編纂所の針生邦男氏の手を煩はし、『蔗庵遺藁』及び『松山序等諸師雜稿』は、昭和三十四五年頃、安良岡康作氏が撮影させたものの燒付を、その當時同氏より贈られたものを使用した。その他田中久夫氏と多賀宗隼氏からは『興禪記』の板本の借覽を許され、瀧田英二氏からは瑞應院舊藏の寫本『半陶藁』及び『石橋頌軸』の異本（歸源庵本）の載つてゐる『禪家叢書』を拜借した。また參考文獻として、廣島大學の中川德之助氏からは、その論著『萬里集九についての研究』の孔版本を頂戴いたし、又『中世文藝』第四三・四四所載の中本環氏の『飜刻「鷗巢詩集」（南江宗沅作品集）』を安良岡康作氏と中川氏の兩方から上・下別々に頂戴した。また太田晶二郎氏は家藏の白玉蟾詩集の萬里集九の拔書の古寫本と、臺灣覆刻の『道藏精華』第十集ノ二の『白玉蟾全集』（文山遜叟蕭天石選刊）を貸して下さつた。又安良岡氏は、南江宗沅と金春禪竹との關係を說いた伊藤正義氏の『金春禪竹之研究』、表章・伊藤正義兩氏共著の『金春古傳書集成』を貸して下さつた。いづれもこゝに厚く御禮申上げる次第である。

また諸本の閱覽については、東京大學史料編纂所には『秋澗泉和尙語錄』『蔗庵遺藁』『漁庵小藁』『梅花無盡藏』

（平戸藩松浦家舊藏八册本）を底本として、靜嘉堂文庫には『松山序等諸師雜錄』を底本として、彰考館文庫には『無象照公夢遊天台石橋頌軸』を底本として、國立國會圖書館には『興禪記』を底本として、國立公文書館內閣文庫には『無象和尙語錄』を底本として、建仁寺兩足院には『鏡堂和尙語錄』を底本として、また史料編纂所には京大本『五山禪僧詩文集』を校訂本として、妙心寺龍華院には『梅花無盡藏』（大阪市立美術館寄託）を校訂本として、國立國會圖書館には『鷗巢贈藁』『鷗巢小藁』『梅花無盡藏』（丹鶴本）『梅花無盡藏』（七册本、鸚軒文庫本）『梅花無盡藏』抄錄本を校訂本として、宮內廳書陵部には『梅花無盡藏』抄錄本を校訂本として、無窮會神習文庫には『梅花無盡藏』零本二部を校訂本として、內閣文庫には『鷗巢詩集』を校訂本として、大東急記念文庫には『梅花無盡藏』類聚本を校訂本として、松ケ岡文庫には『鏡堂和尙語錄』を校訂本として、閲覽撮影利用を許され、南禪寺正因庵の櫻井景雄師は、家藏の『少林四六集』の佚文を補遺に收錄するために提供された。更に京都大學文學部國史研究室には、今回は先方の事情に依つて、再調査することを得なかつたが、嘗て史料編纂所へ貸與謄寫を許され、その史料編纂所本によつて、その內容を校刊に活用させていたゞいたので、こゝに一言御禮を言上する。又前記瀧田英二・多賀宗隼・田中久夫の諸氏は、それぞれ家藏本を校訂本として貸與された。こゝに列記して以て謝意を表する。

また挿入寫眞掲載については、東京大學史料編纂所・妙心寺龍華院・圓覺寺・內閣文庫・正木美術館の御承諾を得た。寫眞撮影については、史料編纂所のものは高澤實氏、龍華院のものは海老根聰郎氏、圓覺寺のものは鎌倉國寶館の安田三郎氏、內閣文庫のものは高澤實氏の撮影にかゝるものである。併せて篤く御禮を申述べる。なほ妙心寺龍華院本『梅花無盡藏』の校訂本使用、全卷撮影、一部を挿入圖版として掲載の諸許可をいたゞくために、禪文化研究所の御斡旋に負ふところが非常に大であつた。更に、正木美術館所藏の諸軸の掲載については館長正木孝之氏の行屆い

た御配慮と御厚意に心から感謝しなければならない。又その間に立つて、燒付の入手を御斡旋下さつた田中一松氏、東京國立文化財研究所及び同所の川上涇氏にも深甚の謝意を表する。また圓覺寺所藏の無象靜照自署の寫眞入手については鎌倉國寶館長貫達人氏の斡旋に負ふところが多大である。同氏にも深謝しなければならない。

これら總てのことを含めて、建仁寺兩足院の伊藤東愼師、南禪寺正因庵の櫻井景雄師、內閣文庫の福井保氏・木藤久代女史、國立國會圖書館の五十嵐金三郎氏、靜嘉堂文庫の小松原濤氏、大東急記念文庫の西村淸氏、彰考館文庫の福田耕三氏、松ヶ岡文庫の古田紹欽氏、圓覺寺宗務總理井上禪定師、宮內廳書陵部の北條文彥氏、禪文化研究所の木村靜雄・加藤正俊兩師、尊經閣文庫の飯田瑞穗氏、前田享子女史、彰考館の『無象照公夢遊天台石橋偈軸』の撮影を斡旋して下さつた史料編纂所の菊地勇次郎氏、及び妙心寺龍華院主藤井俊雄師の御懇情に深く感謝する。

なほ東京大學史料編纂所長沼田次郎氏、同所の彌永貞三・今枝愛眞・川村新一郎の諸氏、東福寺山內願成寺の福嶋俊翁師、立正大學の桃裕行氏、及び瀧田英二氏・安良岡康作氏・中川德之助氏には、右に述べた事象以外でも、有形無形の助言や激勵を賜はつた。殊に全六卷を通じ、第一卷を除いて、他の悉くの卷に亘つて、その所收本の過半をその架藏本の利用に負うてゐる建仁寺兩足院の院主伊藤東愼師には、本集の校刊を終へるに際して、特に感謝を捧げなければならない。同師の全面的な御協力がなかつたならば、本集の完成は見られなかつたに相違ないのである。また今枝愛眞氏は昭和二十二年より同二十九年迄、私がもくろんでゐた禪宗編年史料の編纂の助成をして下さつた。その編纂材料として、多くの語錄詩文集を史料編纂所をはじめとして諸方から採訪全篇書寫を私と共に行つた。それはその頃社會狀勢もまだ落付かず、何時如何なる理由で、私が史料編纂所から離れなければならなくならないとも限らなかつたので、萬一の場合に手許に諸本を備へて編纂を續行しようとの意圖のためであつた。幸にして私はその頃には

史局を離れずに濟み、さきの理由は杞憂に過ぎなかつたが、編年史料編纂の方が中斷してしまつた。そこで、その頃共に書きためておいた語錄詩文集の全寫原稿が空しく筐底にのこつた譯であるが、今回の本集の原稿に轉用して、再び活用の途が開けた次第である。每卷、殊に前半の每卷、「他の目的のために」同氏の手を煩はしたやうに序文に記したのは、實はかういふ事情である。最終卷の序に、改めてこの間の事情を說明し、謝意を表し、同氏の勞に報いる次第である。

終に、この出版に際しては、東京大學出版會の中平千三郎・成田良輔・大江治一郎の諸氏に一方ならずお世話になり、御迷惑をかけた。また途中で本集の擔當から離れられた齋藤至弘氏、また退職された公文（くもん）（現姓水流（つる））京子女史にも、嘗ての御助力に對し、本集完結に際し、改めて御禮を申述べる。又第一卷以來蔭に在つて內校を擔當して下さつた元山不二子夫人、退職後同夫人と共に內校に從事された水流京子夫人にも、最終卷刊行に際して、改めて多年に亘る煩雜な校正をなし遂げて下さつた御勞苦に對して深謝の意を表する。更にこの煩瑣な組版をお引受け下さつたヨシダ印刷に對しても、校訂者として、さぞ御迷惑をかけることが多かつたであらうとお侘やら御禮やらを一言申上げたい。

なほこの出版は、文部省昭和四十六年度科學研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受けて成就したものである。六年の長きに亘つて繼續して本補助金を支給され、こゝに完成を見るに到つたことに對して謝意を表する。

昭和四十七年三月十九日

玉村竹二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com